

アンコール・ワットに墨書を残した 森本右近太夫一房の父・森本儀太夫の墓をめぐる

中尾芳治

はじめに

私は1991年から石澤良昭上智大教授(現学長)を団長とする「アンコール遺跡国際調査団」の考古班の一員として、カンボジア・アンコール遺跡の調査と保存・修復活動に参加することを通じて多くの知見を得ることが出来た。私が森本右近太夫とその父森本儀太夫に関心を持ったのは、もちろんアンコール・ワット調査の折に有名な森本右近太夫の墨書を見たことにある。それに加えてアンコール遺跡の調査活動中面識を得た、フランスのブルノ・ダジャンス教授の著書が石澤教授の監修のもとに中島節子訳『アンコール・ワット—密林に消えた文明を求めて—』(創元社「知の再発見」双書)として1994年に出版され、石澤教授が「アンコール社会と日本人訪問者」と題して墨書をめぐる諸問題を紹介される中で「右近太夫が父儀太夫とともに、父の生誕の地の京都山崎に移り住んでいた」と述べておられることであった。私自身が京都府大山崎町に居住していることもあって森本儀太夫親子の事跡に関心を持ったのがそもその発端である。

以来、墨書に関する諸文献に目を通すことを心がけてきたが、2006年2月、たまたま目にした京都府南部のミニコミ紙『ほーむめいどあさひ』(vol.83)に作家の津田三郎氏が「京の町に史実を追って第二話 森本儀太夫と乗願寺秘話」と題して森本儀太夫が永禄5年(1562)京の山崎に生まれていること、親子の墓が京都寺町の乗願寺にあることを書いておられた。それを読んだことが契機となって同年4月に乗願寺を訪ね、森本儀太夫の墓に参詣するとともに、住職の岩井義俊師のお許しを得て5月に墓碑面の拓本を採らせていただいた。

森本右近太夫の墨書をめぐって論ずべき問題は数多いが、以下の小文は森本儀太夫の墓の調査の過程で判明した諸事実の一部についてまとめたものである。

1. 森本右近太夫一房の墨書

アンコール王朝は、9世紀から15世紀前半に至る約600年余にわたって東南アジア大陸部に栄えた古代クメールの王朝である。特に12世紀から13世紀にかけて、アンコール・ワットを築いたスールヤヴァルマン2世やアンコール・トムを築いたジャヤヴァルマン7世の

時代に最盛期を迎え、現在のカンボジアを中心にベトナム南部、ラオス、タイからマレーシア半島にまたがる大王朝を造り上げた。その都の遺跡がアンコール遺跡群で、現在、世界文化遺産として世界の人々に注目されることとなっている。

このアンコール遺跡は、1860年にフランスの博物学者アンリ・ムオーによって調査され、ヨーロッパの人々に紹介されたことによってひろく知られることになった。

ところが、それよりも200年余りも早い17世紀前半に森本右近太夫一房という日本の武士をはじめ多くの日本人がアンコール・ワットに参詣していたことが、アンコール・ワットの十字回廊などに残された14個所の墨書(A～N号墨書)によって知られる^(注1)。その中で最も有名なのが森本右近太夫一房が寛永9年(1632)正月に残した次の2個所の墨書である。A号墨書はアンコール・ワットの十字回廊の南廊石柱に、N号墨書は第一回廊内の北経蔵入口に書かれている(写真1・2、中尾撮影)。

その釈読と讀下し、大意を以下に掲げる。

(釈読)

A号 寛永九年正月^ニ初^ニ此所^ニ来^ル生国日本
肥州之住人藤原之朝臣森本右近太夫
一房 御堂^ヲ心[□]^(カ)数千里之海上^ヲ渡一念
之儀^ヲ念^シ生々世々娑婆寿世之思^ヲ清^ル者也
為其^ニ佛^ヲ四軀立奉^ル物也

文字上の「□」は、以前の釈文に従ったが確信を持ってないもの。「佛」「躰」「條」以外は常用字体としている(吉川聡2008)。

撰州津国池田之住人森本義太夫
右[○]実[○]名[○]一[○]吉[○]善[○]魂[○]道[○]仙[○]士[○]娑[○]婆[○]
是^ヲ書物也
尾州之国[○]名[○]谷[○]之都[○]後[○]室[○]其
老母亡[○]魂[○]明[○]信[○]大[○]姉[○]為[○]後[○]世[○]是
書物也

寛永九年正月廿日

(讀下し)

寛永九年正月に初めて此所に来る。生国日本、肥州の住人、藤原の朝臣森本右近太夫一房、御堂を心がけ、数千里の海上を渡り、一念の儀を念じ、生々世々娑婆寿世の思いを清める者なり。其の為に仏四体を奉るものなり。



写真1 森本右近太夫一房の墨書(A号墨書)

写真2 同左(N号墨書)

撰州津国池田の住人森本儀太夫
右実名一吉、善魂道仙士、娑婆の為に
是を書くものなり。
尾州の国名谷の都、後、其の室
老母の亡魂、明信大姉の後世の為に是を
書くものなり。

寛永九年正月廿日

(大意)

日本の肥州(肥前或いは肥後国)の住人である藤原朝臣森本右近太夫一房は、
寛永九年(1632)正月にはるばる数千里の海上を渡って
この御堂(祇園精舎)に参詣し、撰津池田の住人である父森本儀太夫一吉の
現世利益と、尾張名古屋出身の亡母明信大姉の後生の為に
四体の仏像を奉納したことを書くものである。

寛永九年正月二十日

N号 〇初^ニ此所^ニ来^ル〇
肥州之住人藤原之朝臣森本右^(近)〇〇
一房御堂^ヲ心^{カケ}数千里之海上^ヲ渡一念

之儀[○]ヲ念^シ生々世々娑婆寿世之思^ヲ清^ル
者也為其 佛^ヲ四躰立奉^ル□□

寛永九年正月卅日

N号墨書は、A号墨書の前半と同一内容で、日付が正月30日になっている点が異なる。森本右近太夫一房は、寛永9年正月20日にアンコール・ワットに参詣して十字回廊の石柱に墨書した10日後の正月30日に、その前半部分を北経蔵入口に墨書している。すなわち、一房は少なくとも10日間はアンコール・ワットに滞在したことになる。

また、B～M墨書を判読すると、慶長17年(1612)、寛永9年(1632)など17世紀前半の頃に、肥州・堺州・城州(京都)・大坂の武士や商人たちが単独あるいは集団で、また夫婦でアンコール・ワットを訪ねていることが分かる(吉川聡2008)。

森本右近太夫一房をはじめ多くの日本人がなぜはるばる数千里の海上を渡ってアンコール・ワットに参詣したのかについては、一つは当時の朱印船貿易を通じて多くの日本人が東南アジア各地に渡航し、日本人町を造って活動したことが挙げられる。カンボジアにはメコン川とトンレサップ湖に通ずるトンレサップ川の交わる河港プノンペンと、当時の首都ウドンの東南数キロに位置するトンレサップ川の外港ピニャールーに日本人町があった(岩生成一1940・58・66)。

もう一つは当時の日本人がアンコール・ワットを仏教の聖地である「祇園精舎」の遺跡と考えていたことである。^(注2)後者については早く伊東忠太氏が水戸の彰考館に伝わる「祇園精舎図」(財団法人水府明徳会徳川博物館所蔵)がアンコール・ワットの図であること、その裏書き文書から長崎の大通辞島野兼了が3代将軍家光の命を受けて中天竺の祇園精舎に至り、これを実写して持ち帰ったものの写しであることを明らかにしている(伊東忠太1913)。

A号墨書をめぐっては論ずべき問題は多々あるが、本論文の主題は森本右近太夫一房の父、森本儀太夫をめぐりいくつかの問題である。

2. 森本儀太夫の経歴^(注3)

森本右近太夫一房の経歴がよく分からないのに対し、その父森本儀太夫は加藤清正の武将として著名な人物であり、また城普請でも知られた存在であった。儀太夫が加藤清正の家臣となったのは幼時に清正の隣家に住んでいた縁によると伝える。天正17年(1589)の本渡城(現熊本県本渡市)攻撃では、清正の三傑の一人と称され、500石を加増された。「文禄の役」(文禄2年・1593)の晋州城攻撃では「亀甲車」を考案して石垣を撥ね崩し、一番

乗りして名声を上げた。この功績で豊臣秀吉からは「正宗」の刀と「儀」の一字を賜った。肥後国熊本へ入国後、儀太夫は5200石を賜り、先手三備の二番備の武者奉行となり、津奈木城の城代となった。

熊本城築城に当たっては二の丸北西隅に三階櫓を築き「森本櫓」・「儀太夫櫓」と呼ばれたが、明和7年(1770)の火災で焼失した^(注4)。また、江戸城普請の折、加藤家の普請奉行として桜田・日比谷一帯の石垣築造に功のあったエピソードが『明良洪範』に載せられている。加藤家の改易(寛永9年)前に浪人し、京都に来て、正保4年(1647)に病死した^(注5)。

3. 乗願寺と森本儀太夫の墓(写真3～5)

浄土宗捨世派に属する乗願寺は、天正4年(1576)、僧信窮が京都五条坊門芝山町(現仏光寺西町)に開創、天正13年(1585)に現在地(下京区寺町通仏光寺下る)に移転し、本堂八間四面・地藏堂・開山堂・方丈などを有していた。しかし、天明8年(1788)の大火によって伽藍はことごとく焼失し、その後旧観に復したが、明治5年(1872)の上知令により、境内の約三分の一を政府に献上し、更に明治21年(1888)の火災により境内地・伽藍などは大幅に縮小された。明治27年の本堂落慶以後再建が進み、大正15年(1926)に書院が新築されて現在に至っている^(注6)。

乗願寺に森本儀太夫の墓があると分かったのは、住職の岩井師の話によれば、平成18年(2006)から20数年前に、「九州から来た森本ですが、私たちの先祖である森本儀太夫の墓所が乗願寺にあるでしょうか」と訪ねてきたのがきっかけであったという。

一方、岡山県津山市の森本謙三氏(当時津山科学教育博物館・歴史民俗館長)は、先祖である作州森本氏の出自をたどる調査の中で、森本儀太夫が同族で、その墓が京都の乗願寺にあることを知る。平成3年(1991)1月に岩井義俊師に手紙を出され、3月に儀太夫墓に参詣されたことから両者の交流が始まった。謙三氏は平成3年に「清和源氏武家より基督教信徒へ―津山森本家の歩いた道千年―」と題する展覧会を津山科学教育博物館・歴史民俗館で開催され、森本一族の系図など津山森本氏の出自と歴史に関する研究成果を発表されている。

平成5年(1993)には乗願寺で森本儀太夫親子の位牌(写真6～9)が発見され、その後、そこに記される儀太夫の子左太夫の墓碑も発見されるなど新事実がつぎつぎと明らかになった。

その頃、連絡を受けて森本謙三氏を訪ねられた石澤良昭氏は、以上のような新事実を知って以後その紹介とそれについての見解を発表されるようになる(石澤良昭1994・2003・2004)。この小文の冒頭で紹介した「アンコール社会と日本人訪問者」もその一つである。

写真3
京都市乗願寺山門



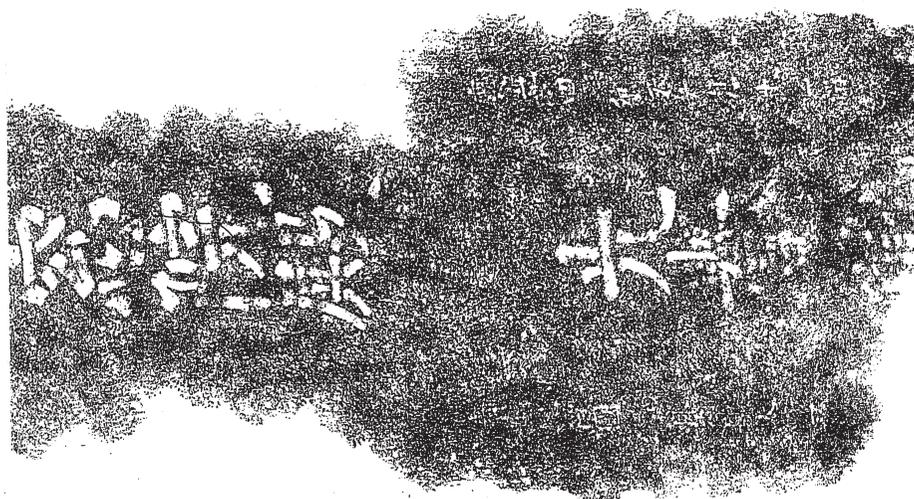
写真4
乗願寺墓地の一隅にある
森本儀太夫の墓



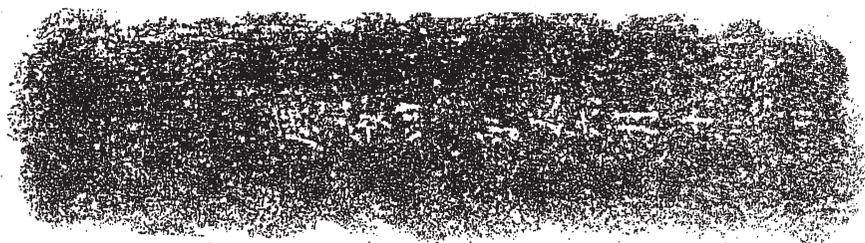
写真5
森本儀太夫の墓



森本儀太夫墓碑拓本 (京都市兼願寺)



慶安四^辛卯 天六月十一日



素生肥後国 森本儀太夫

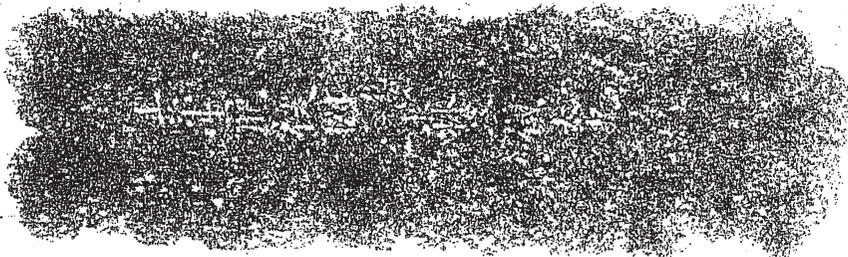


図 森本儀太夫墓碑拓本

一方、平成7年ころ「祇園精舎図」を初めて見た横山勝行氏は、多くの文献を駆使するとともに乗願寺にも資料採訪して研究を進められ、「祇園精舎図」とその裏書き、森本右近太夫の墨書や森本一族の事績について『祇園精舎図について』と題する優れた研究を平成10年(1998)に発表された。^(注7)

このようなアンコール・ワットに墨書を残した森本右近太夫とその父森本儀太夫に関する新事実は、折からのアンコール遺跡への関心の高まりとも相まってマスコミの注目するところとなり、新聞・テレビでも度々報道されるようになっていく。^(注8)

4. 森本儀太夫の墓碑と位牌

2006年4月28日、乗願寺住職岩井義俊師を訪ね、初めて墓碑を見たときは、その下部は埋没していて、中央の院号「月窓院殿光譽道悦」の部分が判読できたのみであった。

墓碑は天明8年(1778)と明治21年(1888)の2度にわたる罹災によって傷んでおり、院号の下方左右に文字が刻まれているのが分かったが、肉眼では判読できなかった。その時はまだ位牌の存在を知らなかったときなので、その墓碑が儀太夫のものであることを確認するために5月14日に拓本を採らせていただいた。

その結果、院号下方左の刻字が「素生肥後国森本儀太夫」、右の刻字が「慶安四辛卯天六月十一日」と判読できることが分かり、この墓碑が森本儀太夫のものであることが確認できた(図)。その後、儀太夫の位牌(写真6～9)を見せて頂き、墓碑と位牌の内容が一致することを確認した。

位牌表

月窓院殿光譽道悦居士 森本儀太夫
月桂院殿應譽道感一信居士 森本佐太夫
寶壽院殿心月圓諦大禪定門 肥後森本左近
超春院華香幻意童子 森本玄徳子

位牌裏

窓 慶安四辛卯六月十一日 宝 寛永二戌年
桂 延宝二甲寅三月廿八日 超 天和二壬戌正月廿一日
加藤主計頭家臣 森本儀太夫右末孫當時肥後之
城主細川家臣森本儀十郎殿事
嘉永二己酉年四月廿五日墓参有之而造営之

位牌の文面から加藤清正の家臣森本儀太夫の末孫で、細川家の家臣であった森本儀十郎



写真6



写真7

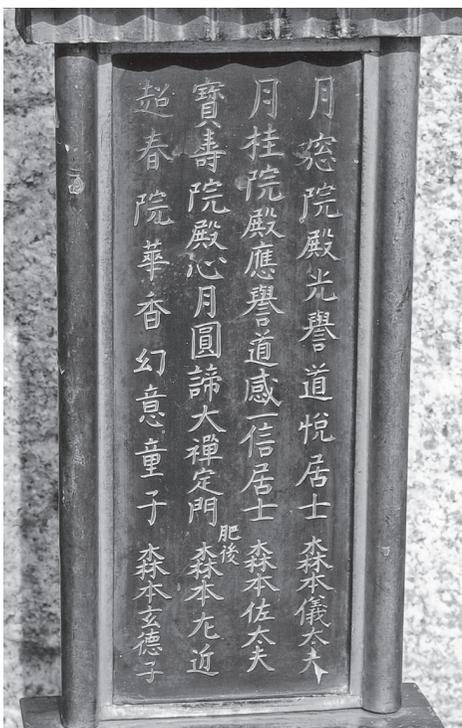


写真8

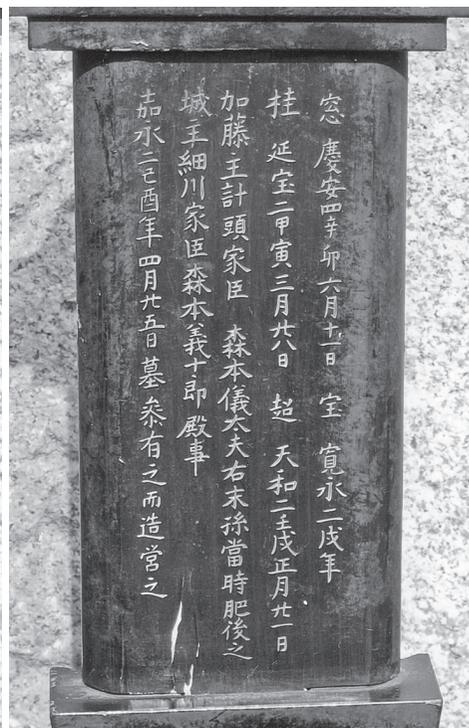


写真9

写真 森本儀太夫の位牌 6(表)、7(裏)、8(表細部)、9(裏細部)

が、嘉永2年(1849)4月25日に墓参しこの位牌を造営したことが分かる。『続肥後先哲偉蹟』巻4の「森本一端」の項の記載によれば森本儀十郎は、先祖森本儀太夫の子四郎兵衛を初代とする細川森本家の七代目に当たる。

位牌に記される月桂院殿應譽道感一信居士森本佐太夫は、儀太夫の子であると思われるが、同じく儀太夫の子で細川森本家の初代とされる四郎兵衛^(註9)との関係がどうなるのか。横山勝行氏は両者は同一人物であり、位牌にある肥後森本左近も『続肥後先哲偉蹟』に記す細川森本家二代めの新兵衛であると考証されている。

乗願寺で森本儀太夫の調査が進められる過程で、位牌に記される森本左太夫の墓碑が書院の庭の池の石組みに転用されて残っていることも明らかになった(写真10～12)。

この左太夫については、アンコール・ワットに墨書を残した森本右近太夫一房その人であるとする説も提起されていて(石澤良昭1994・2003・2004)、今後の大きな研究課題になっている。

ところで、森本儀太夫の没年は墓碑・位牌によって慶安4年(1651)6月11日と確定できたと思われるが、ほかに①慶長17年(1612)説(『熊本県大百科事典』・『ウィキペディア』)、②正保4年(1647)説(『続肥後先哲偉蹟』巻4)がある。①の根拠は不明であるが、儀太夫の子右近太夫のアンコール・ワット墨書によれば寛永9年(1632)当時、儀太夫は摂津池田で在命であるから誤りである。②の根拠も不明であるが、横山勝行氏は「慶安4年」とすべきところを取り違えて記されたものとされている。

森本右近太夫一房の墨書の解釈に当たって「父儀太夫の菩提を弔い、亡母の後生を願って四体の仏像を奉納した」とする論考・著書が多いが、寛永九年当時、儀太夫が存命であったことを考えれば、黒板勝美氏の「父の現世利益、亡母の後生菩提のために仏像4体を奉納」や高山勝行氏の「父儀太夫の長寿を祈願し、また亡き母の菩提を弔うため、御堂(アンコールワット)に参拝し、4体の仏像を奉納」のように解すべきであろう。

紙数の関係で詳述できないが、長崎の大通辞島野兼了が家光の命を受けて「日本の寸尺を以て絵図し」携え還ったとされる「祇園精舎図」が、実はアンコール・ワットに墨書を残した森本右近太夫一房自身によって作図され、持ち帰られたとの見解は、すでに石澤良昭氏や高山勝行氏によって述べられており、特に高山氏の著書に詳述されている。私も同意見であるが、その絵図が単なる絵図ではなく「日本の寸尺を以て絵図」した実測図であったことについては、右近太夫が寛永9年正月20日から30日まで、少なくとも10日間にあたってアンコール・ワットに滞在していること、その父森本儀太夫が勇猛な武将であるに止まらず、城普請に優れた土木・建築技術者でもあったことと関係があるように思える。父子相伝の技術が右近太夫の絵図作成に大いに役立ったであろうことを推定しておき



写真10
乗願寺書院の庭と池



写真11
池内手水鉢後方の森本儀
太夫の墓石(裏面)



写真12
森本儀太夫の墓石。「月桂
院殿」の刻字が見える

たい。

なお、森本儀太夫が京都山崎で誕生したことや、加藤家浪人後に右近太夫とともに一時山崎に滞在したと伝えることなどについては確証を得ることが出来なかった。^(注10)この小文で言及できなかった多くの問題点については後考を俟って発表したい。

森本儀太夫の事績の探索に当たってはアンコール遺跡全般を含めて石澤良昭氏から数多くの学恩を受けている。儀太夫の墓碑や位牌の調査に当たっては乗願寺住職岩井義俊師から数々のご教示と資料提供を受けたほか、森本儀太夫の末裔にあたる森本信一氏からもご教示と資料提供を受けた。また、森本右近太夫の墨書の釈読については奈良文化財研究所の吉川聡氏から教示と資料の提供を、大阪城天守閣の北川央氏からは儀太夫の家譜や城普請について教示を受けたほか、熊本県教育庁文化課の亀田学氏からは儀太夫に関する多くの史資料の提供を受けた。記して厚くお礼を申し上げたい。

(なかお・よしはる = 当調査研究センター副理事長・元帝塚山学院大学教授)

注1 アンコール・ワットには、17世紀前半にこの地を訪ねた日本人の墨書が14箇所発見されている。これらの墨書については1927年(昭和2)に黒板勝美・岩生成一が調査して以来、1931年(昭和6)に尾高鮮之助が、1958年(昭和33)に清水潤三がそれぞれ調査を行い、釈読を試みているが、長年にわたる自然の風化による剥落などもあってその釈読には異同があった。さらに1970年以後のカンボジア内戦時の汚損などもあって墨書の遺存状況は良くなく、その判読は難しくなっている。そうした状況にかんがみ、奈良文化財研究所は2003年(平成15)に墨書の赤外線写真の撮影を行うとともに、2004年(平成16)と2007年(平成19)に墨書の熱覚調査を行い、それまでの釈読と併せて14箇所の墨書(A号～N号)の釈読を実施した。本論文で引用する墨書の釈読は、奈良文化財研究所でその調査と釈読に当たられた吉川聡氏の釈読によるものである。その読下しと大意は先学の所説を参考に私が行ったものである。

吉川聡「日本人墨書の研究」『カンボジアにおける中世遺跡と日本人町の研究』奈良文化財研究所、2008年

注2 これは当時の日本人の誤解であって、真実の祇園精舎の遺跡は1863年にイギリスの考古学者カニンガムによって発掘され、確認された。ネパールとの国境に近いインド北部にあるマヘート遺跡がそれに当たる。東西約250m、南北約400mの範囲に、寺院・僧院・仏塔など18箇所の遺構が検出されていて、史跡公園として整備されている。1986年から関西大学が日・印共同学術調査団を組織して発掘調査を行い、1997年に報告書を刊行している(関西大学日・印学術調査団 1997)。

注3 『続肥後先哲偉蹟』巻4、「森本一瑞」の項。

『三百藩家臣人名事典』第7巻、新人物往来社、1989年、「森本一瑞」の項。

熊本日日新聞社・熊本県大百科事典編集委員会編『熊本県大百科事典』1982年

中野嘉太郎『加藤清正傳』青潮社、1979年

横山勝行『祇園精舎について』1998年などを参考にした。

注4 『日本城郭体系第18巻福岡・熊本・鹿児島』253頁、新人物往来社、1979年

注5 『続肥後先哲偉蹟』巻4、「森本一瑞」の項。

注6 『乗願寺略縁起』による。

注7 非売品であるために広く知られてはいないが、「祇園精舎図」の研究に関する必見の書である。私は2006年6月、森本謙三氏(2002年没)の跡を継がれた森本信一氏を津山に訪ねてお話を伺った時にその存在を知り、勝山氏にお願いしていただくことが出来た。

注8 1996年、TBSテレビ「世界不思議発見」、2003年10月4日付朝日新聞「be on Saturday」、2004年2月16日付夕刊読売新聞「歴史のかたち」など。

注9 『続肥後先哲偉蹟』続4「森本一瑞」の項では、四郎兵衛について「(先祖森本儀太夫)其子四郎兵衛、島原一揆の節、御人数に加り相働、寛永十八年二月、歩御使番、寛文十一年十二月、島原にて働第一に思召し、百五十石拝領、大組附」とある。

注10 中野嘉太郎『加藤清正傳』2頁には「清正、幼名は夜叉若、(野史)五歳より山州山崎に飄零す、此時隣家に森本力士、飯田才八と云う者あり、力士は、祖父右京親細川高国に従ひ、桂川にて戦死し、力士(後号主馬)山崎に長となり、其子力士、清正と同年の生れ也、才八も又同列たり(加藤家伝)」とある。大阪城天守閣博物館の北川央氏の教示によれば、『加藤家伝』は元文元年(1736)刊行で、著者は森本儀太夫である。細川森本家の当主は代々儀太夫を名乗っており、該当するのは享保12年(1727)に家督を継ぎ、『肥後国志』などの著作のある4代森本儀太夫昌栄、号一瑞である。

参考文献

石澤良昭「落書きと歴史—17世紀にアンコール・ワットを参詣した日本人」『文化庁月報』No.309
1994

石澤良昭「1632年にアンコール・ワットを訪れた森本右近太夫一房の消息」(『三笠宮殿下米寿記念論集』三笠宮殿下米寿記念論集刊行会)2003

石澤良昭「17世紀にアンコール・ワットを参詣した日本人」(『季刊文化遺産—特集アンコール文明を科学する—』(財)島根県並河萬里記念財団)2004

伊東忠太「祇園精舎図とアンコル、ワット」(『建築雑誌』第313号)1913

伊東忠太「アンコル・ワット」(上・下)『史蹟名勝天然記念物』第17集 7号(上)・8号(下)
1942

岩生成一「アンコル・ワットに於ける森本右近太夫の史蹟」(『歴史教育』第3巻5号、歴史教育研究会)
1928

岩生成一『南洋日本町の研究』南亜細亜文化研究所 1940

岩生成一『朱印船貿易史の研究』1958

京都府埋蔵文化財論集 第6集

- 岩生成一『朱印船と日本町』至文堂 1966
- 尾高鮮之助『印度日記—仏教美術の源流を訪ねて—』刀江書院 1931
- 関西大学日・印共同学術調査団『祇園精舎—サハート遺跡発掘調査報告書』本文編Ⅰ 1997
- 黒板勝美「アンコールワット石柱記文について」『史学雑誌』41 編8号 1930
- 斎藤忠「日本人の祇園精舎観」『インド学諸思想とその周延』（仏教文化学会十周年・北條賢三博士古希記念論文集）2004
- 清水潤三「アンコール・ワットの石柱にのこる日本人墨書の調査」（『インドシナ研究』有隣堂出版）1965
- 清水潤三「アンコール・ワットに残された森本一房の墨書について」（『史学』第44巻3号、三田史学会）1971
- 藤岡通夫『アンコール・ワット』彰国社 1943
- 横山勝行『祇園精舎図について』（私家版）花車利行監修・横山勝行編著 1998
- 吉川聡「アンコール・ワットの日本人墨書調査」（『シンポジウム東南アジアの日本人町』奈良文化財研究所）2004
- 吉川聡「日本人墨書の研究」（『カンボジアにおける中世遺跡と日本人町の研究』奈良文化財研究所）2008